

強者の戦略

こんにちは、北林です。いよいよあと一週間ちょっとで2011年です。早いですね。地デジが2011年からなんていう話をよくテレビでやっていましたが、ずっと先だと思っていました。でも目の前なんですね。時間がたつのは早いです。なんだか変なたとえになってしまいましたが、時間はあっという間に進んでいきます。センター試験で30日を切りましたので、一日一日大切にしてほしいと思います。センター試験が終わったら、いつまでも引きずらず、気持ちをきりかえて二次対策にがんばってください。

さて、今回も実際に「東大スパルタン」で使用した画像を出しながら解説をしていきましょう。スパルタンではかなり「濃い」60分の授業が展開されます。ここでご覧のみなさんも少しだけ、その濃さを体験してくださいね。それではいきます！

まず時期がはっきりしています。大戦期からということですので、「1914年から1925年前後」を想定します。

主問は「アジアとヨーロッパにおける大衆的な政治運動の展開」です。ここで注意したいのは、政治運動というどうしても権力闘争などを思い浮かべてしまうのですが、あくまで“大衆的な”運動を答えないとはいけません。革命が起こっても、そこで権力者のことだけを書くのではなく、民衆がどう動いたかに触れないといけません。注意してください。東大は特に長い解答になるので、文構成が大事になります。問われていることは明確にしておきましょう。

第1次世界大戦は総力戦であり、植民地の人々も動員された結果、列強の国内はもとより、その支配地域も大きな変動に見舞われた。そのため、第1次世界大戦期から1920年代半ばにいたる約10年間には、世界各地で様々な性格をもつ大衆的な政治運動が高まることになった。この時期のヨーロッパとアジアにおける大衆的な政治運動の展開について、具体的な事例を挙げながら、20行以内（1行30字）で論ぜよ。解答は、解答用紙（イ）の欄に記せ。

**この時期(第一次世界大戦期から1920年代半ばの約10年)
ヨーロッパとアジアにおける大衆的な政治運動の展開
具体的な事例を挙げながら**

「大衆的な政治運動」なので

孫文(政治家・医者)・レーニン(革命家)・ガンディー(弁護士)などの活躍だけを書いてはいけません。

強者の戦略

ではまずヨーロッパから見ていきます。

ヨーロッパは、第一次世界大戦のメインの戦場です。1914年の7月末に大戦が始まった当初、各国は「クリスマスくらいには終わるだろう」とたかをくくっていました。ところが、ドイツのシュリーフェン計画が失敗して膠着状態に入ってから、足かけ5年も戦うこととなります。そして、イギリスの外交などで戦線は拡大し、文字通りの世界大戦となってしまいます。

近代の戦争の特徴は東大で何度か問われたことがあります、「新兵器」が登場して死傷者の数がこれまでの戦争より激増します。また「総力戦」で、国を挙げての消耗戦となります。総力戦では戦場だけではなく、銃後の守りで女性も戦争のために働くこととなります。物資はまず戦場へ優先され、各国の国民の生活はかなり苦しくなるのですが、そのためそれらが革命へとつながってしまいます。ロシア革命はもちろんのこと、ドイツも最後は革命で戦えなくなっておわってしまうんですね。

第一次世界大戦期から1920年代半ばの約10年 →1914年から1925年前後を想定しましょう

○ヨーロッパ 大戦中は総力戦！ 革命の布石

戦後はヴェルサイユ体制

ロシア	中央アジアで動員に反対して武装蜂起 ペトログラードでのストライキ(労働者・兵士など) 三月革命→帝政崩壊 →十一月革命→ソヴィエト政権
ドイツ	干渉戦争時→戦時共産主義 全国的に一揆・反乱 キール軍港での水兵暴動 革命→共和政へ ヴァイマル憲法で参政権 ヴェルサイユ体制への不満→ヒンデンプルク大統領
イタリア	戦後のインフレなど ヴェルサイユ体制への不満 都市部(北イタリアなど)での労働運動など →左派の台頭を恐れる人々が ファシスト党を支持→独裁へ

※その他：総力戦を支えた民衆・女性の発言力が増大した時期でもある

ちなみに、イギリスでは女性に参政権が与えられます(1918年第4回選挙法改正)、こうした時期に女性が軍需工場などで働いたりしたことが背景となっています。

20年代も今回の想定に入っていますから、イタリアではヴェルサイユ体制への不満から、ファシズム政権が誕生することもおかないといけません。ファシズムというとドイツを思い浮かべるとはいますが、イタリアが元祖です。ドイツは1930年代になってからです。

強者の戦略

それではアジアをみてみます。大戦中はイギリスの植民地をはじめ、戦争中に列強に支配・協力させられたりして、戦争に巻き込まれます。イギリスの植民地などで大戦に協力した地域は、戦後に自治や独立を期待します。

戦後、パリ講和会議では、アメリカ大統領のウィルソンが戦争末期に提唱した「十四カ条」の原則が基本理念とされ、その中での「民族自決」が各植民地に期待をもたせます。しかし実際、「民族自決」の考え方は植民地などには適応されず、期待を裏切ります。それらが民族運動に繋がっていくのです。

○アジア パリ講和会議での民族自決！→しかし…

中国	パリ講和会議での民族自決・二十一カ条要求破棄などを求める 五・四運動→反日・反帝国主義運動が高まる ←文学革命で啓蒙 これを受けて孫文が中国国民党を結成 ←大衆政党に 第一次国共合作/五・三〇運動など→大衆が政治に参加
朝鮮	日本の統治下(1910~) 三・一運動 →日本は武断政治から文化政治へ
インド	イギリスが戦後の自治の約束を守らない ガンディーが非暴力・不服従運動を展開 →民族運動に一般大衆を加えた全インド的な民族運動
日本	国民の政治参加を求める大正デモクラシー
東南 アジア	インドシナ・マラヤ連邦・ミャンマーなどでも民族運動

《解答例》

第一次世界大戦での総力戦は国民の厭戦気分を高め、これらが革命の布石となった。ロシアでは動員に抗議して中央アジア諸民族の蜂起があり、1917年にはペトログラードでのデモやストライキから軍隊も加わり革命となり、帝政崩壊、同年11月にはソヴィエト中心の社会主義国家となった。その後干渉戦争中の戦時共産主義に対して一揆が全国に広がった。ドイツではキール軍港の水兵暴動から革命がおり共和政が成立、ヴァイマル憲法で参政権を得た民衆は、ヴェルサイユ体制への不満からヒンデンブルクを大統領に選んだ。イタリアもヴェルサイユ体制に不満を抱き、労働者や農民の運動が高揚、北部でストライキや工場占拠が広がった。左派を恐れる人々はファシスト党を支持、独裁政権が生まれた。一方民族自決が適用されなかったアジアでは民族運動が活発化した。中国では文学革命がおり、パリ講和会議での二十一カ条要求破棄や日本の利権返還を求めて五・四運動がおこった。孫文は国民党を大衆政党とし、1924年には第一次国共合作が成立、その後五・三〇事件が起こり多くの民衆が政治活動に参加した。朝鮮では三・一運動が起こり、以後日本は武断政治から文化政治に転換した。インドでは戦後自治を与えられず、ガンディーが非暴力・不服従運

強者の戦略

動を展開、民族運動に一般大衆を加えた全インド的な運動になった。日本では国民の政治参加拡大を求める大正デモクラシーの運動がおこり、労働運動・農民運動も活発化した。(600字)